

『九月九日憶山東兄弟』 王維

自然派の詩人 望郷を詠う

九月九日憶山東兄弟 王維
 獨在異郷爲異客 獨り異郷に在りて異客と爲り
 每逢佳節倍思親 佳節に逢う毎に倍親を思ふ
 遙知兄弟登高處 遙に知る兄弟高きに登る處
 遍插茱萸少一人 徧く茱萸を挿して一人を少くを

唐代三大詩人の一人で詩仏といわれた王維は六九九年山西省太原で生まれた。尚書右丞として宮廷に仕え宮廷詩人として名をなし、詩は李白(詩仙)、杜甫(詩聖)とならび称された。李白より二歳上、杜甫より十三歳上である。家柄は代々地方の長官を務めていた。当時この様な家柄の人は都へ出て科挙の試験を受け資格をとらねば出世は出来なかった。そこで王維も十五歳で都へ出て今でいう受験勉強をしながら二十一歳で合格した。表題の詩は十七歳の時、一人旅の身空暮らしの中から生まれた作品である。当

時は現代のように個人の本(詩集)を出すという様な時代ではもちろん無い。自分の作った詩を持ち歩いて、しかるべき人物に見て貰う、温巻(懐へ入れてあるから温まってる巻物)という方法で詩人として認めてもらうというシステムであった。

自然をこよなく愛した人生

王維の詩は自然の美と自然にとけこんだ人間の楽しさを詠じ、中国自然詩の最高の詩人と賞せられている。

阿倍仲麻呂が唐の朝廷で秘書官として仕えていた時、王維も宮廷に仕え宮廷詩人として活躍していた。阿倍仲麻呂が帰国する時(実際は海上で暴風雨に遭い現代のベトナムの北海岸に漂着し帰国できなかった)百官の送別の宴の席上で、「送秘書晁監還日本國(秘書晁監の日本國へ還るを送る)」という切々たる別離の情の詩を作っていた。自然を愛するに通じるやさしい気持ちの持ち主でもあった。

王維は自然をこよなく愛した。宋之問(？〜七二三年)の別荘だった所を宋之問が亡くなった後、荒れたままだったのを買って、手入れしそこで悠々自適の生活を楽しんだ。都の東南に藍田山があり、輞川という川の流れがあるので、藍田山荘、又は輞川荘という。夫々すばらしい自然の趣がある二十景があり、日々役人として出廷し休みの日に

は詩を作ったり、画を描いたり、気の合う友人と酒を斟み交わして暮らした。

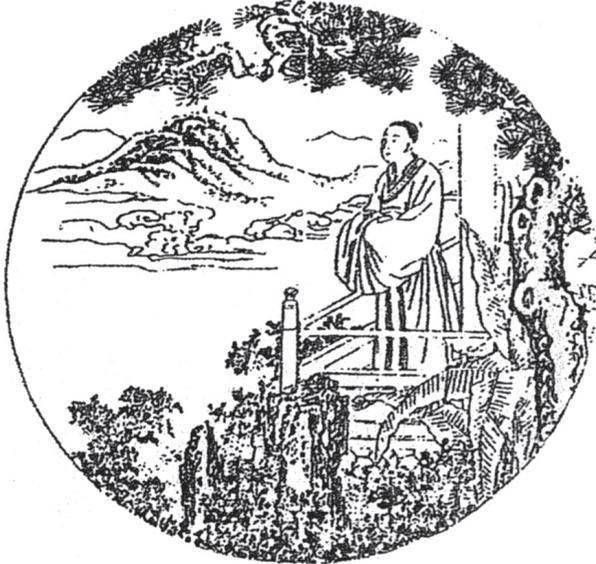
中国自然詩の最高の詩人といわれるすばらしい四百詩もの詩は、この自然の中の輞川荘で作られたのである。テキストA五四―二 竹里館もその名詩である。

画も名手で山水画を得意とし、南画の元祖として崇められてゐる。

大志を抱いて

都へ出る

王維は十五歳で科挙の試験を受けるべく一人で都へ出た。日々真面目に勉強に励んだのもその胸の中は科挙の試験に合格し、立派な役人になる願望があったからである。そ



して一年が過ぎ二年が過ぎ三年目を迎えた秋の重陽の節句に「九月九日憶山東兄弟」の詩を詠んだ。時に十七歳の作である。

たった独り故郷から離れた土地でよそ者として滞在しているが重陽の節句に逢う度に、ひとしお故郷の親、兄弟のことが思われてならない。きつと今日は親、兄弟がみんなそろって、あの小山に登ってるだろうナア（いつもの様に菊酒をくみ、家族の無事息災を念じているだろうナア）

みんな一様に茱萸を髪にさして団楽しているだろうが、ただ一人欠けている者のことを思い話し合っているだろう。

九月九日：重陽の節句（奇数は陽数で陽数の一番大きな

数は九、九（陽）が重なるので重陽という。）この日は陽気が発散するから、邪気も発散するとされ、邪気をおさえる為の一つの行事として高いところに登る風習があった。そして菊の花びらを浮かべた菊酒を飲んだ。菊は悪いものを除くという言い伝えがある。又茱萸（赤い実でぐみに似ているが、ぐみではなく山椒の一種）身につけた。茱萸は邪気を払うとされている。

山 東：詩題の山東は、山の東にいる兄弟達のことを

憶って作ったという意で、山東省ではないと石川忠久先生は解説されていた。「王維は山西省の生まれ、山東は嶠山こうざん以東の地、今の山西・河北・河南・山東の各省は山東にあたる」とした説もあるが、王維が独り異郷で、あの山の東に故郷があるといつも山を眺めていたに相違ないと思うのである。

鑑賞

前にも記した通りこの詩は王維が十七歳の作である。十五歳で都へ出て来たのだから、今三回目の重陽の節句を迎えたのである。未だ年端もいかぬ王維が親もとを離れた暮らしの日々は、生まれ育った家、肉親、山河など、きつと恋しく思っていたであろう。二年余り異郷にいて日々の故郷を恋うる気持ちが高まっているだろうと、じーんと胸に迫ってくるのである。十四歳までは重陽の節句には親、兄弟と一緒に小山に登っていた。その時のあれや、これやの話題、又親や兄弟のその時の姿が浮かんでくる。今年もきつと変わらぬ様子で小山に登っているだろうが、ただ一人欠けている者のことを話しているだろう。とりもなおさずただ一人は王維のことである。きつと親兄弟は自分のことを案じ、健やかさを願っている

てくれることだろう。王維が詠んだ望郷のこのすばらしい詩は肉親の情を詠んだ名詩でもある。ちなみに王維には縉・縉しん・紘せんと・紘こう・紘たんとの四人の弟とほかに何人かの妹も含めての大家族であったが、中でも王縉は後年、代宗朝の宰相となった人物である。

起句は「獨在異郷爲異客」みごとに詠い出して「異郷」と「異客」の「異」の文字を二度用いる法は一人心細い日々を送っていた様子をうまく表現するのに効果を上げている。この寂寥感せきりやうかんは第二句の「倍思親」へと傾斜する。都長安での節句の賑いの華やかさの中で、いっそうの孤独をかみしめる若者は、その思いをはるか遠いわが家へとさせてゆく。「倍」の一語はこの心理の表現として妙を得ているといえよう。何回読んでもこのすばらしい句に心がひきつけられる。(詩情を高めるため下三字「爲異客」で踏み落としてある)

起句の「獨」が詠い出し、結句の「一人」が詩の終わりしりでこれもみごとな詩で、家族そろって小高い丘に登り、それぞれの手には食べ物たべものが握られてあの話この話と話題は尽きず、笑い声わらひこゑがこだましているであろう。だがふと、王維はその中に自分が居ないことに気づく。いずれにしても回想と一人だけ足りないという現実とを織り込んだこの手法は一見何でもないようだが、詩作の上で誰にでもできたものではない。